

「日本佛寺建築沿革」と石井敬吉の経歴について
東照宮の社殿に対する「権現造」という用語の成立をめぐって
 A Study on "Nihon Butsuji Kenchiku Enkaku" and Keikichi Ishii's Career
 On the Beginning of the Term "Gongen-Zukuri" for the Main Buildings of Toshogu

○加藤千晶¹, 重枝豊²

*Chiaki Katoh¹, Shigeeda Yutaka²

This paper studied when a term "Gongen-zukuri" came to be used for the composite main shrine buildings. The documents which named Toshogu main shrine "Gongen-zukuri" first are "Nihon Butsuji Kenchiku Enkaku" written by Keikichi Ishii. By this documents, a building of Toshogu namely "Toshogu Shrine style" was understood to be a structure of the Shinto and Buddhism mixture. "Gongen-zukuri" did not yet have the mean composite main shrine buildings in those days.

1. はじめに

所謂「権現造」という用語は、今日では、東照宮の建築のように、本殿と拝殿を石の間や幣殿等で接続した複合社殿として用いられており、その名称の由来は、東照宮に祀られている徳川家康の神号「東照大権現」から来ているとされている。

「権現」とは、仏、菩薩が、人々の救済のため、神などの仮の姿となって現れること、またその姿を指す用語で、日本の仏教における神仏習合と関係している。

東照宮の建てられた江戸時代において、工匠の所持していた資料¹⁾や神道辞典²⁾では、仏教建築の要素を備えた神社本殿を「権現造」と呼んでおり、東照宮の建築や複合社殿には、「権現造」という名称はまだ用いられていなかった。

近年、複合社殿に使用されている「権現造」という用語の疑義³⁾や本殿と拝殿とを中間部分で接続した複合社殿⁴⁾に関する重要な論考が出ており、日本建築史において、「権現造」という用語や複合社殿に関する学術的な見直しが求められているといっても過言ではない。

本稿では、いつから「権現造」という用語が複合社殿の建築に用いられるようになったかという問題について検討したい。

管見では、明治 27 年 (1894) 11 月『建築雑誌』第 95 号に掲載された、石井敬吉「日本佛寺建築沿革」が、東照宮の建築を「権現造」と呼んだ初出の一次資料である。そこで、本稿では、1)『建築雑誌』第 95 号掲載の「日本佛寺建築沿革」における、「権現造」という用語に関する内容の検討し、2) 石井敬吉の経歴に関して、明治 20 年代の建築学に関してまとめられた稲葉信子の諸論考を参考にまとめた。

2. 「日本佛寺建築沿革」の検討

石井敬吉「日本佛寺建築沿革」は、明治 25 年から明治 27 年の約 3 年間にかけて『建築雑誌』に掲載されたもので、古代から近世までの仏教建築の沿革について、文献資料を用いてまとめている。

「権現造」の用語は、先述の『建築雑誌』第 95 号「日本佛寺建築沿革」の、第十章徳川氏之時代佛寺建築の項目に出てくる。第十章では、上野、増上寺、久能山、日光に建てられた徳川家霊廟について述べられている。

まず、久能山東照宮を始めとする、諸侯（御三家か）によって建てられた東照宮について記述した箇所をみていく。

又駿河國久能山に東照権現の社あり。これ寧ろ神社の部に於て論ずへし。此の社は日光靈屋の雛形として造られたる手初めのものなりとぞ。又権現の社を諸侯に命して各其封土に建立せしめたるを以て日本の内現權造と稱ふるに至れり。

ここでは、「内現權造」という用語が出てくる。同用語の、「現」と「權」の字が「権現造」とは左右逆になっているのは、単なる誤字かどうか不明である。また、同用語が、「内現權造」であるのか、内「現權造」であるのかも不明である。同用語は、「権現造」の名称の由来が「東照大権現」から来ているということが、明治 27 年 (1894) には言われていた可能性を示しているが、本稿ではこのことを指摘するに留める。

次に、日光東照宮について記述した箇所をみていく。

日光の靈屋は元來所謂権現造にして神仏混合にし

1 : 日大理工・教員・建築 Assist., CST, Nihon Univ. 2 : 日大理工・教員・建築 Prof., CST, Nihon Univ.

て一方にては大ひに神社風を帯ふる所ありと雖とも
重に佛寺建築の風體なり。

記述では、東照宮の社殿は「所謂権現造」であると
している。また、権現造は、神仏混合であり、神社風
を帯びているが、主に仏寺建築の風体を成していると
している。東照宮の社殿において、どのような点が神
社風であるか、あるいは佛寺風であるかは具体的でな
いが、少なくとも当時、東照宮の建築、即ち「権現造」
は、神仏混合の造りと理解されていたことがわかる。
しかし未だ、本殿と拝殿を石の間や幣殿で繋いだ複合
社殿の意味として用いられていない。

3. 石井敬吉の経歴について

本章では、明治20年代の建築学に関してまとめられ
た稲葉信子の諸論考を参考に、石井敬吉の経歴をみて
いきたい。

石井敬吉は、慶応2年(1866)に生まれ、明治24年
(1891)7月に帝国大学を卒業すると同時に同大学の
講師に着任した。翌25年3月から同31年12月まで助
教授を務め、第三講義(建築史)を担当した⁵⁾。従っ
て、「日本建築佛寺沿革」は、帝国大学卒業後まもなく
建築史を教えることとなった石井が始めた連載であっ
た。

それでは、石井が学生の頃に帝国大学で開講してい
た日本建築に関する講義は、どのような内容だったの
か。明治22年(1889)から、木子敬清が講師として「日
本建築学」を教えており、その内容は、日本の神社・
佛寺・宮室などの定型と、その木割法の解説が中心で
あった。

稲葉信子が紹介⁶⁾している、明治22年の「日本建築
学」第一回授業の草稿では、神社の部の細分類が記さ
れている。その内の、官幣大中小社、国弊社、郷社村
社鎮守の社殿の細分類を下記の通りに挙げている。

神明造、一間社従五間社迄流レ造り、王神造り、
堰棟造り、加茂様、両部衆合造り、神道斎場所、
八幡造り、八棟造り、権現造り、

このように、講義に「権現造り」の項目があるが、
実際に木子が紹介していた権現造が、江戸時代に理解
されていた「権現造」であったのか、または東照宮の
建築であったのかはわからない。しかし、いずれにし
ても、石井は在学中から「権現造」について認識して
いたとみられる。

4. まとめ

東照宮の社殿を「権現造」と呼んだ初出史料は、明
治27年(1894)11月に『建築雑誌』に掲載された、
石井敬吉「日本佛寺建築沿革」である。当時は、東照
宮の建築、即ち「権現造」は、神仏混合のつくりと理
解されており、江戸時代における「権現造」の仏教建
築の要素を備えたつくりという認識とも結びついてい
た。しかし、この時点では、未だ複合社殿としての意
味は持っていなかったとみえる。

石井が「日本佛寺沿革略」の連載を始めたのは、帝
国大学を卒業して間もなくであり、石井の在学中に開
講していた木子敬清の「日本建築学」では「権現造」
について触れられていた。しかし、木子敬清が「権現
造」について教えていた内容が明らかでないため、ど
のような経緯で「権現造」が東照宮の社殿と結びつい
たかまではわからなかった。

管見では、石井の論考以前の神道や美術等に関係す
る文献から、東照宮の社殿を「権現造」と称した記述
が確認できていないことから、少なくとも建築学の
分野で、東照宮の社殿が「権現造」と結びつけられた
と推察される。

「日本佛寺建築沿革」の記述から、明治27年(1894)
の時点で「権現造」が複合社殿と未だ結びついていな
かったことが明らかとなったため、今後は、「権現造」
がいつから複合社殿の意味をもつようになったのかと
いう点について、検討するつもりである。

5. 註釈

- 1) 大熊喜邦「匠家の傳書と権現造」, 建築史, 第3巻, 第5号, 1941.9
や、内藤昌「様式の集大成—権現造」, 江戸図屏風別巻『江戸の都市
と建築』, 毎日新聞社, 1972年において、「権現造」に関する工匠の
資料が紹介されており、「権現造」が東照宮や複合社殿と結びついて
いなかったことを示している。
- 2) 元禄15年(1702)刊『神道
名目類聚抄』
- 3) 村上初一「構造形式における複合社殿の表記—
権現造と両下造」, 文建協通信, 第125号, 2016.7
- 4) 山田岳晴
「複合的社殿の構成と祭祀者認識の相関 — 「権現造」及び八幡宮
の形態と日光東照宮の意義—」, 『モノと心に学ぶ伝統の知恵と実践』,
國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター, 2012.3.
- 5) 稲葉信子「帝国大学における「日本建築学」講義 建築アカデミ
ズムと日本の伝統」, 東京大学編『学問のアルケオロジー』, 東京大
学, 1997.
- 6) 稲葉信子「木子敬清の帝国大学(東京帝国大学)に
おける日本建築授業について」, 日本建築学会計画系論文報告集, 第
374号, 1987.4